

令和6年度茨城県教育研修センター第3回外部評価委員会記録

日時	令和7年3月6日（木曜日） 午前10時から正午まで	
方法	Web会議システムによるオンライン会議	
出席者	【外部評価委員】 勝二 博亮 委員 植田 みどり委員 荒瀬 克己 委員 沼田 安広 委員 福田 勝之 委員 岡部 佐知子委員 谷津 勉 委員（欠席） 中村 千秋 委員（欠席）	【茨城県教育研修センター】 所長 内桶 博仁 次長 小沼 賢次 次長兼教職教育課長 坂上 有紀 企画管理課長 木村 正之 教科教育課長 小出 岳夫 情報教育課長 工藤 博幸 教育相談課長 坂本 要 特別支援教育課長 内田 隆之 企画管理課指導主事 桧山 龍樹 企画管理課指導主事 畠山 崇
次第	1 開会 2 所長あいさつ 3 議事 (1) 令和6年度各事業等について (2) 外部評価委員による事業評価 (3) その他 4 閉会	

1 開会

2 所長あいさつ

3 議事

(1) 令和6年度各事業等について（事務局より説明）

資料1「令和6年度事業等の実施状況」

資料2「令和6年度各事業における事業評価」

資料3「研修講座（受講後）アンケート結果」

（○は委員、●は事務局を表す）

○資料2の講座を抽出した理由について説明してほしい。

●抽出した理由は、「関連業務への意欲が高まった」の「1 よくあてはまる」の回答の割合が低いところから抽出した。

○抽出した結果から、どのような課題が見えたか。

●受講者の実態把握が十分なされていないという課題が見えた。次年度以降、受講者の実態や声も踏まえて、講師等との打合せを丁寧に行っていきたい。

●インターバル研修のような形の研修は、インターバルの期間が十分にとれないという課題がある。また、安易に事例を使ってしまっているケースもあるので、検討しなければならない。

●指導計画に生かせるような時期や時間の設定に課題がある。また、受講者の習熟度やスキルに応じた講座構築が必要であり、実施要項等で周知することも必要である。

○研修についてのアンケート項目で、自己の在り方・生き方といったようなものについても振り返りを促しているのか。

●研修観の転換というところも含めた振り返りをしている。研修を通して自身の在り方を見つめられたかという視点でリサーチをしていかなければならない。

●受講直後に、知識・技能の新たな気付きと、これからの自分の職務に対する意欲と、自分がどう学んだかどうそれを生かしていきたいかという視点で、リフレクションアンケートを実施している。

(2) 外部評価委員による事業評価

資料4「外部評価委員会評価票の集計結果」

【1 研修センターの事業について】

○研修で一方向的に知識や技能が流されるのではなく、それを受講者がどれだけしっかりと受け止め、どのように自分事化するかといった方向に研修観を転換していく必要がある。

○知識や技能を活用するためには、自己の在り方に対するアプローチがなければならない。学びを深める際には、自己の振り返りが大事である。

○アンケートの記述に、大切な気付きがうかがえる言葉がいくつも出てきたので、研修や研修支援の中で大切にしていきたい。

○知識だけではなくて、その知識を受け止めた自身をどう捉えるかが大事だということを強調していただくと同時に、どのようなアンケート項目を作ればよいか考えていただきたい。

○研修内容の共有について、この現状をどのように捉えているのか。

●研修の共有は、学校全体の知識・技能のアップデートに非常に重要である。本庁各課や教育事務所等とも連携し、研修内容の共有を積極的に働きかけていく。

○研修を受けた教職員の参画意識を高めていくことは、大事な課題である。研修直後のアンケートは、基本的に高くなるが、時間が経つとよく覚えていないことや、学んだことと現実の職場での展開が結びつかないことがある。アンケートの回答には、年に複数回、繰り返し研修を受けられないかという記述があった。実際に日常の実践にどのように生かし、自分自身も振り返りつつ具体的に得た知識や技能をどう組み合わせて展開していくかを考える際に、もう一度確認できるようなインターバルを加える研修の在り方を考えていただきたい。

○丁寧に分析されていて、改善策を考えている。講座のすばらしい内容と教職員のニーズをどのように結び付け、研修意欲を高めていくかが難しい。研修内容を共有する場の設定も常に考えている。研修や実践を積んだ教職員を研修センターの協力者等として活用することも、本人や他の教職員の意欲を高める機会になる。

○研修内容を毎年見直し、いろいろと工夫した結果が、アンケートの高評価につながっている。

○アンケート結果の課題を、どのように検討し、どのように変更したのか、具体的な報告があるとよい。

○研修内容の共有が少ないことについて、初任者等は学校でアウトプットして振り返りことで、知識の定着等にもつながる。2年目以降の受講者にも研修内容の普及の意義を徹底するとともに、管理職が機会を設けることまでが研修や職能開発であることを意識できるように伝えることも必要である。

○キャリアステージや指標と研修プログラムがリンクした図表があると理解しやすい。

●研修内容の共有については、教職員のアップデートを図る上でも伝達するということが重要である。今後、教育庁各課等との連携を図りながら、教職員の資質向上、職能開発という視点から管理職にも働きかけを強化するよう促していく。

○管理職の意識と、伝える機会をくださいというような若手の力の両方が必要である。知識の定着等に関しても、教えられっぱなしになるのではなくて、人に伝えることによって知識の定着も図れる。

○次年度について、長期的に取り組んでいくところと短期的に取り組んでいくところがあるので、無理のない範囲で見直してほしい。

【2 施設設備の整備等について】

- 視察や説明から、健康管理や安全管理は適切に行われている。障害者への配慮も充実させている。雨漏りなど、老朽化が進んでいるので、計画的に優先順位を付け、しっかり予算要求して早めの修繕や整備を進めていただきたい。
- 教育研修センターとしての役割はもちろんだが、非常時に頼れる施設として有効に活躍できるのではないか。防災等についての研修も考えられる。アーカイブのデータセンターとして活用するなど、予算の請求も工夫できるのではないか。
- 講堂など、夏は暑くて冬は寒く、廊下も同様である。天体望遠鏡やプラネタリウム等の施設・設備の修理やバージョンアップを通して研修の質の向上を図ってほしい。
- 屋内外の施設が広いので安全管理が大変だと思う。利用の少ない施設に関しては、他の目的での利用方法の検討を続けていく必要があるのではないか。
- 危機管理では、リスクマネジメントが大事なので、リスクの未然防止の観点から強い要望ができるのではないか。また、別の機能と組み合わせる価値を高めることも考えられる。
- 研修センターの役割と成果の発信がとても大事である。これだけの役割や状況があって、教育も新しくなっていく中で、施設・設備も変えていくようなロジックが必要である。
- 本年度、雨漏りに対応する屋根の改修工事を行っている。県も長寿命化対策を進めており、予防保全という観点を含め施設保全の優先順位を付け、適切な施設維持管理に努めてまいりたい。
- 非常時の施設の役割として、東日本大震災の時には県外避難者の一時避難所として活用された経緯もある。また、本施設において、県の防災危機管理課が防災ネットワークの研修等を行っており、研修や防災のネットワークの一助になればと考えている。

【3 外部評価委員会について】

- 活発な意見が出され議論ができて、まさに第3回が非常に重要だと思う。
- 回数、時期、内容、評価方法、現地視察とオンラインの組み合わせなど、適切である。
- 新年度に、実施計画等を報告する際は、外部評価とリンクしたPDCAサイクルが見える形にしたい。そうすることで、外部評価委員会が単に意見を聞くだけでなく、研修センターのマネジメントサイクルに位置付けられていることが外部にも見えるし、評価委員としても評価したことの責任も見えてくると思う。
- この外部評価に関して、昨年度話されたことについての対応状況がどうなっている、新年度に振り返りがあると思う。
- PDCAサイクルの中での意見の反映は、運営していく上での肝だと考えている。そのため、第1回外部評価委員において、意見への対応表という形で整理させていただいたが、事業計画等への反映の状況やその理由の説明等については、今後、さらに検討していく。
- 次年度の方針は、参加者を主語とした研修への転換となっている。今日の話題となった研修内容の共有や自分のこととして研修を受けていくということなどが、次年度に向けた流れに沿っていたと感じる。
- 学ぶ方としても教える方としても、主体的に学んでいくという意欲をアップさせるような研修を引き続き進めていただきたい。

(3) その他

事務局から今後のスケジュールについて説明

4 閉会